

二〇二二年度 桐朋女子中学校入学試験 (B入試)

筆記試験 (国語)

受 験 番 号

氏 名

【注意】

- 一、問題冊子が配られても、開いてはいけません。
- 二、問題冊子は1ページから17ページまであります。
- 三、「はじめてください」と言われたら、まず、問題冊子の表紙と解答用紙二枚に、それぞれ受験番号と氏名を書きなさい。
- 四、答えはすべて解答用紙に書きなさい。
- 五、問題冊子に書きこみをしてかまいません。
- 六、「やめてください」と言われたら、すぐに筆記用具をおき、解答用紙も問題冊子も表を上にして、机の上におきなさい。
- 七、試験時間は四五分間です。



一、次の①～⑩の——線部のカタカナを漢字に直しなさい。また、⑪～⑮の——線部の読みをひらがなで答えなさい。

- |                         |                       |
|-------------------------|-----------------------|
| ① 人に <u>チュウコク</u> する    | ② 答えを <u>スイソク</u> する  |
| ③ 友人と <u>ヨクジツ</u> に会う   | ④ <u>人口ミツド</u> が高い    |
| ⑤ 楽団を <u>シキ</u> する      | ⑥ <u>ケンチヨウ</u> がある場所  |
| ⑦ 生物の <u>ソンザイ</u> を確かめる | ⑧ 古い知人を <u>タブ</u> ねる  |
| ⑨ <u>チヨメイ</u> な作家       | ⑩ 商品を <u>ナラ</u> べる    |
| ⑪ <u>机上</u> の空論だ        | ⑫ 美しい絵が <u>目に留</u> まる |
| ⑬ 不良品を <u>除</u> く       | ⑭ <u>養蚕</u> のさかなな地方   |
| ⑮ <u>馬が暴</u> れる         |                       |

二、次の(1)・(2)の問いに答えなさい。

(1) 次の空らん適切な漢字をそれぞれ入れ、四字熟語を完成させなさい。

- |               |   |                         |
|---------------|---|-------------------------|
| ① (A) 気 (B) 合 | ： | たがいに気が合うこと。             |
| ② (C) 寒 (D) 温 | ： | 暖かい日が増え、春めいてくるようす。      |
| ③ (E) 刀 (F) 入 | ： | いきなり話の <u>核心</u> に入ること。 |
| ④ 電 (G) 石 (H) | ： | 行動が非常にすばやいようす。          |
| ⑤ 我 (I) 引 (J) | ： | 自分の都合のよいようにすること。        |

(2) 次の語の類義語を考えて漢字二字で答えなさい。

- |      |      |                         |      |      |
|------|------|-------------------------|------|------|
| ① 興味 | ② 意図 | ③ 覚悟 <small>かくご</small> | ④ 賛成 | ⑤ 手段 |
|------|------|-------------------------|------|------|

三、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。ただし、字数制限のある問いに答える場合、「、」「や」「。」等も一字と数えます。

朝、詩音は、昇降口でくつを上ばきにはき替えていた。

脱いだくつを、シューズボックスに入れようとしたときだった。詩音が入れたすぐ下の段に、横から強引にくつを突っこもうとする子がいた。

「1」をひそめて横を見た詩音は、「I」して持っていたくつを落とした。

瑠美奈が、詩音を見て笑っていたのだ。

詩音は呆気にとられた。

——まさか、瑠美奈が坊主になるなんて！

カットモデルをしたばかりじゃないの！

胸の動悸がおさまらなかった。

教室に入ると、すごい騒ぎだった。

キヤーキヤー叫ぶ女子の声と、わけのわからない男子の声がごっちゃになって、騒然としていた。

席につくと、そばに沙耶がきた。

「あなたのせいよ」

いまいまして「2」をしかめて、吐きすてるようにいった。

「あなたが、瑠美奈をそそのかしたんでしょ」

「えっ」

「あのおしゃれな瑠美奈が、坊主になるなんてありえないもの。なんていってその気にさせたの？」

「わたしはべつに……」

「あなたが坊主になってから、瑠美奈のようすがおかしくなったのよ。どうするつもり」  
「どうするって……」

① 詩音が、それ以上しゃべらないとわかると、鋭い目つきでにらみつけて、離れていった。

瑠美奈は女子に取り囲まれ、質問攻めにあっていた。

② 倉田さん、よくやるよな」

気がつくど、詩音の机の横に野島くんが立っていた。

「倉田さん、昨日、坊主にしてくださいって、うちの店にきたんだぜ」

詩音は小さくうなずいた。

「理由もきいたよ。小柳さん、先生にいわれたんだろ。ふつうとちがっていると、いじめられるから、坊主をやめろって」

「あ……うん」

「そのことをすごく怒ってた。ちがうことを認めあうことが、いじめをなくすことなのになって。だから、抗議の意味もこめて、自分も坊主になるんだって。それでさ」

そういって野島くんは、ポリポリと頭をかいた。

「おれにも、坊主になれっていうんだ。三人に増えたら、坊主がふつうじゃないとはいえないでしょうって」

自分の後頭部をさすりながら、野島くんはうーんとうなった。

「坊主が嫌いってわけじゃなくて、おれ、ぜっぺきだしさあ、似合わないと思うんだよなあ」

困ったように「3」をふって、野島くんは自分の席にもどっていった。

③ 胸に熱いものがあふれて、こぼれそうになった。

刈り上げたばかりの瑠美奈の頭は、ネギ坊主みたいで、愛嬌あいきょうがあってかわいかった。まわりに集まった女子と、瑠美奈はなにやら熱心に話しこんでいる。

ときどき、《Ⅱ》笑い声まできこえてくる。

瑠美奈の坊主は、もうクラスに受け入れられているようだ。

瑠美奈には、人の目を笑い飛ばす強さがある。明るさがある。

からに閉じこもってしまいう詩音とは、④ ダイショウ的だった。

偏見へんけんと闘たたかうには、⑤ その中に飛びこんでいくことも大事なのだと、瑠美奈が教えているようだった。わたしも一歩ふみ出すときだと、詩音は思った。

放課後、詩音は帰ろうとする瑠美奈を呼びとめた。

「倉田さん、お願いがあるんだけど」

「え、なに？」

瑠美奈は不安そうに「1」をひそめた。

「頭、さわらせてもらってもいい？」

「え、この頭？」

瑠美奈は、自分の頭を指さした。

「うん。なんか気持ちよさそう」

「こんなんでもよかったらどうぞ。でも、おんなじ坊主なのに」

「ううん、わたしはもうのびかけてるから」

そういうと、詩音は片手で瑠美奈の頭をやさしくなでた。

「あ、やわらかい芝生の感触」

「へえ、じゃあ、小柳さんのは？」

「わたしはイガグリかな」

不安そうだった瑠美奈の顔が、ほっとしたようにほころんだ。

「ごめんなさい。わたし、いままで素直じゃなくて……それに意地っぱりで、おくびようで、  
断で」  
a 優柔不

「ちょ、ちょっと待ってよ。どうしたの急に」

瑠美奈は、目をまん丸にして詩音を見た。

「反省したの。自分で壁を作ってたんだって」

詩音は、自分が素直な気持ちになってるのを感じた。

「倉田さんて、美容師さんのいうことに、b かぶれただけだと思ったの。本気で偏見におかしいあおうと  
するなんて、思わなかった」

「うーん。かぶれたところもあるかも。だって、圭子さん、カッコいいんだもん」

瑠美奈は、坊主の頭をポリポリとかいて、鼻にしわをよせて笑った。

「わたしも、からを破って外に出ていかないと、なにもつかめないって思った」

「あのさ、よかったら、⑥ 小柳さんが坊主になった理由、教えてくれないかな」

瑠美奈が、詩音の表情をうかがうようにきいた。

「そうだね、と詩音は自分の頭をそつとなでた。」

「三学期の終わり、えっと三月の初めだったかな、お姉ちゃんがね、学校の校則に抗議して、坊主にな

ったの。でも学校ではだれも賛成してくれなかった。一人でがんばってるお姉ちゃんを見てて、わたしもなんかしなくちゃって思ってた」

自分の足もとを見たまま、詩音は続けた。

「でもね、それだけじゃないの。わたしって、一歩がふみ出せずに、足踏みばかりしてる子だったの。そんな自分が大嫌いだっただから、わたしにとって、坊主になることは、大きな冒険だったの。それができたら、自分が変わるんじゃないかって期待したんだ」

「そっかあ」

「けど、坊主になったら、ふつうじゃない子って、見られるようになった。つらかった。お姉ちゃんみたいに、堂々としていられなかった。やっぱり、いままでと同じわたしのままだった。⑦でもね、気がついたの」

そこで、詩音は顔をあげて瑠美奈を見た。

「自分を変えるのは、髪形かみがたを変えることだけじゃない。もっと大事なものは、人と出会うことだって」

「人と？」

瑠美奈が「4」をかしげた。

「うん、倉田さんに会って、わたしも変わりたいって思った」

「え、わたしと？」

一瞬、瑠美奈は《Ⅲ》した表情を浮かべた。

「倉田さんって、周囲の目とか気にしないで思ったことを即行動そくにうつすし、明るくて前向きだし、偏見にも挑戦ちようせんする勇氣もあるし、わたしもそんなふうになりたいって」

「うわあ、それ、ほめすぎじゃない？ テレるなあ」

瑠美奈はくすぐったそうに頭をなでたあと、五月の空のように晴れやかな笑みを浮かべた。

「じゃあ、今度はわたしの番ね。わたしが坊主になったのは」

「待って」

瑠美奈が説明しようとする、詩音が手で止めた。

「わたしにいわせて。意地っ張りなわたしを、なんとかしようって、思ってくれたんでしょ」

「うん、そんなとこかな」

「ごめんなさい」

「ううん。坊主になったら、いままでとはちがう目で見られて、小柳さんの気持ちも理解できたし。それにこうやって、小柳さんが心を開いてくれたのが、一番うれしいな」

あったかいものが、胸にあふれた。

「わたし、こんなに素直に、自分の気持ちを話したのって、初めてかも」

「よかった。じゃあわたしたち、もう友だちだよね？」

たしかめるように、瑠美奈が詩音を見つめていった。

「うん」

「じゃあ、これからは詩音って呼んでいい？」

「うん……」

コクンとうなずいて、詩音はうつむいた。

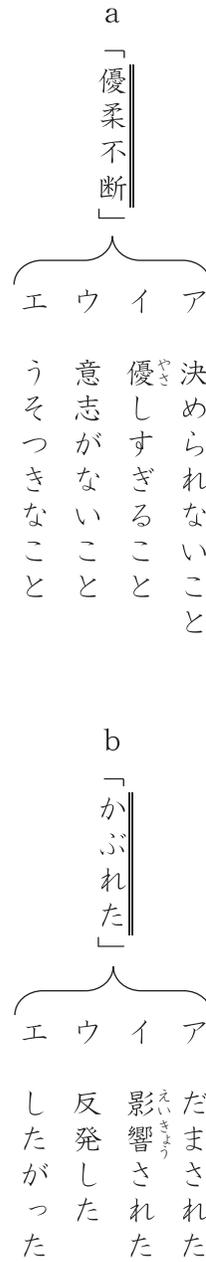
ずっと手の届かなかったものが、目の前に差し出されていた。

うれしくて、照れくさくて、こそばゆいような気持ちだった。

ほっぺたがチカチカした。

(朝比奈蓉子『わたしの気になるあの子』ポプラ社)

問い一、——線部 a 「優柔不断」、b 「かぶれた」の意味として最も適切なものを次の中からそれぞれ選  
び、記号で答えなさい。



問い二、空らん《 》 I Ⅲ に入る語句として最も適切なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答え  
なさい。ただし、同じ記号を二度用いてはいけません。

- ア ムツと
- イ ギョツと
- ウ キョトンと
- エ ぼうつと
- オ どつと
- カ にやりと

問い三、空らん【 Ⅰ】 1 Ⅱ 4 に入る語として最も適切なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えな  
さい。ただし、同じ記号を二度用いてはいけません。また、二か所ある【 Ⅰ】 1 には同じ語が入り  
ます。

- ア 眉まゆ
- イ 胸
- ウ 目
- エ 背せ中
- オ 小首
- カ 顔
- キ 頭
- ク 眉み間ま

問い四、——線部①「詩音が、それ以上しゃべらないとわかると、鋭い目つきでにらみつけて、離れて  
いった」とありますが、ここでの沙耶の心情として最も適切なものを次の中から選び、記号で答  
えなさい。

ア 瑠美奈が坊主になったのは、瑠美奈に自分と同じ髪形にするよう、詩音が無理やりせまに迫ったからであると考え、詩音をおそれている。

イ 瑠美奈が坊主になったのは、魅力的みりよくな詩音の髪形に瑠美奈が強いあこがれを持ったからであると考え、詩音をねたんでいる。

ウ 瑠美奈が坊主になったのは、言葉たくみに詩音が瑠美奈をさそったからであると考え、詩音に怒っている。

エ 瑠美奈が坊主になったのは、詩音が坊主になったことでおしゃれに興味がなくなったからであると考え、詩音に反発している。

問い五、——線部②「倉田さん、よくやるよな」とありますが、ここでの野島くんの気持ちとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア おどろき      イ 冷やかし      ウ 同情      エ 感心

問い六、——線部③「胸に熱いものがあふれて、こぼれそうになった」について、

(1) ここで表現されているのはだれのどのような気持ちですか。解答らんに合うように答えなさい。  
(2) どうしてこのような気持ちになったのですか。三十字以内で答えなさい。

問い七、——線部④「タイショウ」を漢字に直しなさい。

問い八、——線部⑤「その中に飛びこんでいく」とありますが、具体的にどうすることですか。

問い九、——線部⑥「小柳さんが坊主になった理由」とありますが、その「理由」を二つ、それぞれ三十字以内で答えなさい。

問い十、——線部⑦「でもね、気がついたの」について、

(1) 詩音はどのようなことに気がついたのですか。

(2) 気がついたことにより、どのように行動し、どのような結果になりましたか。

四、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。ただし、字数制限のある問いに答える場合、「、」「や」「。」「等も一字と数えます。

もう少し\*リルケの『若き詩人への手紙』にある言葉を読んでみましょう。「もしあなたの日常があなたに貧しく思われるならば、その日常を非難してはなりません、あなた御自身をこそ非難なさい」と書いたあと、こう続けています。

あなたがまだ本当の詩人でないために、日常の富を呼び寄せることができないのだと自らに言いかけさせることです。というのは、創作する者にとっては貧困ひんこんというものはなく、貧しい取るに足らぬ場所というものもないからです。

ここでリルケは、詩を書くのに特別な体験はいらぬし、特別な出来事も必要ない。そして、自分の日常が貧しいから詩を書けないと不満を感じているだけではない。しかし、X、  
というのです。

これは、誰だれもが陥おちいりやすい罠わなかもしれませぬ。私も①|そういうことを考えている時期がありました。「自分には経験が足りないから、自分の思うように物が書けない」「自分は経験が足りないから、うまく考えることができない」。人はそう思いがちです。

でも、リルケはけっしてそんなことはない、というのです。私たちは自分の経験の意味をあまり顧みていない。自分の経験を素通りしている、というのです。

ここで少し言葉を感じ分けるためにあえて、定義を試してみましよう。それは「体験」と「経験」の違いです。

これからお話しすることは、私の着想ではありません。森有正(一九一〇〜七六)という哲学者が語ったことです。森有正もリルケを愛した人でした。

彼は「体験」とはその人を自分の世界に閉じ込めることで、「経験」とは自己を深化させ、同時に世界に向かって私たちを開いていくものだというのです。

森有正の言葉をもう少し味わってみましよう。「体験」をするとき、とても視野が狭くなりがちです。そして、深まらない。流れていくという語感があります。

いっぽう、「経験」は座標軸が全く違います。私の感覚では、十年一日のごとく、というのが経験の感覚です。ある人にいわれたことが、十年後にやっと分かる、そうしたことまさに経験的な出来事です。

いま読んだリルケの手紙には次の一節が書き記されています。

そして、たとえあなたが牢獄に囚われの身となっていようと、壁に遮られて世の物音が何一つあなたの感覚にまで達しないとしても——それでもあなたにはまだあなたの幼年時代というものがあるではありませんか、あの貴重な、王国にも似た富、あの回想の宝庫が。そこへあなたの注意をお向けなさい。この遠い過去の、沈み去った感動を呼び起すようにお努めなさい。

★  
1

ここでいう「幼年時代」とは、単に幼い時代のことではありません。世界をまっすぐに見ていた時代という意味です。何か社会的な目的に従って世界を見るのではなく、直に見ることができた時代ということです。そこで経験されたところが、詩のモチーフになるにふさわしい、というのです。

「モチーフ (motif)」という言葉は、「主題」と訳されることもあります。ラテン語の「動かす (movere)」が語源で、私たちが突き動かすはたらきのことです。リルケは、それを外界ではなく、内なる世界に見出すことを若者に促すのです。

★  
2

次は、リルケの手紙ではなく、詩を読んでみましょう。これはリルケの初期の詩です。彼は、「貧しい言葉」を好むと歌います。

日常の中で困窮している貧しい言葉を、  
人目につかぬ言葉を、私は大へん好む。  
私の祝宴から私は彼らに色彩を贈る、  
すると彼らは微笑み、だんだん快活になる。

彼らがおずおずと心の内に押し殺していた本質が、  
新しくまたあらわれてくる、だれの目にも見えるほど。

彼らはまだ一度も詩の中を歩いたことがない、  
いま身ぶるいしつ彼らは私の歌の中を歩く。

（『初期詩集』より）『リルケ詩集』高安国世訳

ここでいう「貧しい言葉」とは、人があまり見向きもしないような言葉です。世の人がそれは**凡庸**だというような言葉です。現代の日本であれば「愛」や「祈り」あるいは「熱情」なども「貧しい言葉」かもしれない。人々が、その意味を見失った言葉です。詩人の使命とは、こうした「貧しい言葉」に新しい息吹を吹き込むことだといふのです。

さらにリルケは、詩を書くとは、誰かが色を塗ったような言葉を、相手に贈ることではなくて、もと言葉の内に秘められた自然の色彩を贈ることだといふんです。世の中が扱っている記号としての言葉ではなくて、**② 生ける言葉を届けることだ**といふのです。

だから言葉は、一見みじめに見えるものでも、自分で育て上げることができれば、それが皆さんの人生を支える一語になることだってあります。

リルケは、次のような詩も残しています。

わたしたちの最後から一步手前の言葉は

みじめな言葉かもしれない、

しかし、母なる良心を前にして

わたしたちの最後の言葉は美しいにちがいない。

なぜなら、どんな苦さも

押えることのできない

ひとつの望みのすべての努力を

ひとつの言葉に要約しなければならぬのだ。

（「ヘフランス語の詩」より）『リルケ詩集』高安国世訳

人には③「私の一語」、「人生の一語」というものがあるのです。私にとってはそれは「悲しみ」という言葉でした。私にとっては、ある耐えがたい悲しみの経験があった。でも、私が悲しみから一歩足を踏み出すことができたのは、「悲しみ」という言葉の本当の意味が分かってきたからです。

皆さんにとってもそれぞれの人生の一語があります。それを、ある熱情をそそいで探してほしいんです。

自分にとってかけがえのない一語は、皆さんの人生を決定する言葉になります。それはリルケがいうように、大変貧しい姿をした言葉なんです。そんなに特別な言葉ではないのです。別に王様の王冠のように輝くような言葉ではありません。誰もが使って、使い古した、改めて考えてみるまでもないような日常的な言葉なんです。

「人生の一語」はおそらく、生涯にいくつも見つけなくてはならないのだと思います。たとえば十年にひとつかもしれません。皆さんは今、十四歳ですね。だからもし、皆さんが今、人生の一語を見つけられれば、二十四歳になったらまた見つけて、また十年後に見つけていく。

《 I 》、たったひとつの言葉を見つけるのに、大きな熱情を費やしたとしてもおそらく、皆さんが

後悔こうかいすることは無いと思います。それほど充実じゅうじつした経験なのです。その過程も、その一語との邂逅かいこうも、です。

世の中は、皆さんに何でも早く、たくさん覚えるのがいいというかもしれないかもしれませんが、早く、多く覚えられることはそれでもかまいません。《Ⅱ》、そうできないものには時間と熱情をそそがねばなりません。

一見すると非効率だけど、かけがえのないものは、自分自身で探さなくてはなりません。《Ⅲ》、それはほかの誰も皆さんに与あたえてはくれないからです。皆さんはそれを「読む」という経験のなかで見つけるかもしれません。しかし、それは「書く」ことにおいても起きるのです。人は、「書く」とき、自分の言葉の最初の読者でもあるからです。

私たちは「人生の一語」をすでに自分の内に宿しています。誰からも与えてもらう必要はないのです。生きるとは、自分のなかにすでにある見過ごししている何かを見出そうとすることにほかなりません。そのとき「読む」と「書く」という営みは、たしかにその道へと私たちを導いてくれるのです。

（若松英輔『14歳の教室 どう読みどう生きるか』NHK出版）  
\*リルケ——ライナー・マリア・リルケ（一八七五〜一九二六）。ドイツの詩人。

\*座標軸が全く違います——ここでは「体験」と「経験」という言葉のとらえ方は全く違います、ということ。

\*邂逅——めぐりあうこと。

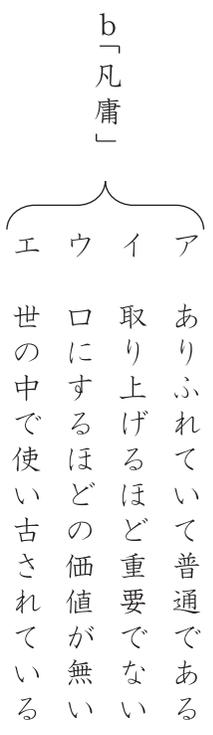
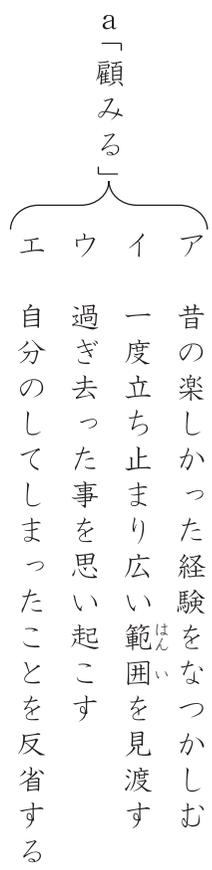
問一、本文中の空らん  Xに入る文として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 日常では体験できない特別な経験を言葉にする「感性」を磨みがいておかなくてはならない

イ 日常では体験できない特別な経験を逃さないよう「アンテナ」を張っていないとはならない  
 ウ 日常のなかに潜ひそんでいる当たり前なものを見逃さない「眼め」を開いていなくてはならない  
 エ 日常のなかに潜んでいる当たり前なものにも感謝する「心」を持っていなくてはならない

問二、——線部①「そういうこと」とはどういうことですか。その内容に当たる語句を、解答らんに  
 続く形になるように、本文中から二十字以内でぬき出しなさい。

問三、——線部 a 「顧みて」、b 「凡庸だ」とありますが、「顧みる」「凡庸」の意味として最も適切な  
 ものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。



問四、で囲んだ「そして、たとえあなたが」から始まるリルケの手紙の一節の内容をまとめた次の文の空らん「        」A・Bに当てはまる適切な語句を、本文中の★1〜★2からぬき出して答えなさい。

詩のモチーフは、「A」ではなく、「B」から見出すのである、と述べている。



